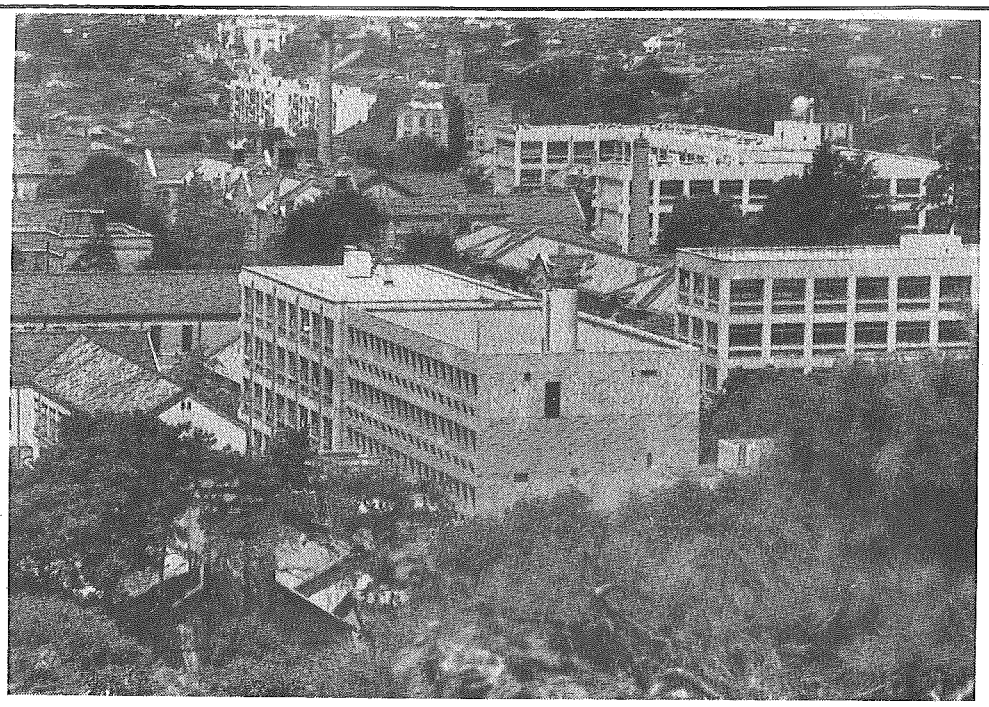
洛友會々報

京都市左京区吉田[illegible]
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会



吉田山より眺めた電気工学第二学科教室（中央後方）と電気綜合館（関電記念館）（中央手前）
右方は土木新館、右後方は化学綜合館）

隨感

雲晴れた伊勢神宮

鳥養利三郎

昨夏久しぶりにお伊勢まいりをした。終戦の年の十一月初めの新任奉告参拝以来のことだから十八年目というわけである。何にしてもよい機会であるから、神鋼電機の工場見学も兼ねて行こうと考えているところへ、津の日本硝子繊維工場からも、立ち寄って見て行けというご案内をいただいた。この行には京都から日本電池の山岡会長が同行されるし、また鳥羽山田では神鋼電機の小田島顧問が自ら案内役に当られるのみならず、津での見学にもついて来てくれる。三人は大学時代のクラス・メイトなのだから、この二泊三日の旅が期せずしてクラス会のかたちにもなったので、一しおたのしさを加えた。

鳥羽山田は私にはなつかしい。神鋼電機がまだ今日のように発展しないころ、昭和二年から同二十年までの十八年間、私は顧問として毎月一度ずつ、通算およそ二〇〇回、同工場へ通いつづけた。現在の社長以下重役幹部諸氏は皆そのころからの友人であり、その外にも多数同学の後輩がいる。こういう訳で色々の感懐を抱きながら旅だって行った。

伊勢市に下車すると、車を走らせて先ず両宮に参拝した。大体どこでも、思い出に残る昔のおもかげの失せ果てた、荒廃の跡を見る位いやなものはない。今度のお参りにも、実のところそういうけねんが全くなかったわけではない。だが来て見ると、見渡す山も川もまた神苑もほとんどすべて変わりなく、昔のままの清い美しい姿が見られたのは、本当にうれしかった。柄にもなく何故そういう感傷じみた思いにひたるのかと聞かれるなら、私には実はちょっとした思い出話があるからである。

終戦直後占領軍は日本の神社に極端に圧力を加えて来た。伊勢神宮は特に苦しい立場に追いつめられ、この先どうなって行くのか、心痛のドン底におちいっていたらしい。或日私は高倉神宮大宮司の来訪を受けた。話の大筋は次の通りであった。

「神宮の将来がどうなって行くのか、心配にたえない神宮の領域は広いが、今迄のところ詳細な学的調査は行なわれていない、最悪の場合には没収される恐れもあり、また周囲から侵入されたり荒らされることもないとはいえない。全域に亘って生物学的研究を進めるならば、相当の科学的成果を収め得るのではないかと思う。神宮の将来を思うとき、その科学的価値を社会に認識させるのが最良の道であろうと思う。幾日も幾夜もの苦慮のあげく、そこへ到達した。京都大学の管理上に置いてもよろしいから、適当な具体案をねってもらいたい」

その後も二度ばかりお目にかかったと思うが、事が極めて重大で、私共だけで片のつくわけのものではなく、とかく考えている中に、神社問題に全体として比較的楽々と活路が開かれて、結着の見込みがついものだから、この話は世間に洩れないまに、立ち消えてしまったのである。全くやみからやみへの話にすぎないが、話をした人にはそれこそ命をかけた、せっぱつまった言であったし、聞かされた者にも時代の苦悩をひしひしとこたえさせたのである。

神宮科学機関論を打ち出す程の知慧者の大宮司にも、二十年の後には、神宮が国民大衆をしてバカンスを楽ましめる場になるまで民主化して、このように運営にプラスしようとは思いも及ばなかったらしい。またあのころを知る者からいえば、国民自らもこんなに早くこのような生活ができる程、日本の国勢が早く発展しようとは考えていなかったというのが、本音ではなかろうか。

ただ一すじ

北陸の旅のついでに、さきごろ永平寺へ詣でた。いささかも仏道のわきまえのない私ではあるが、老杉につつまれた山の斜面に、ゆるやかな長い廊下で結ばれて、どっしりと打ち建てられている昔ながらの七堂がらんのたたずまいからは、外では見られない気高いものが感じられるので、私は機会さえあれば、少々の都合はつけてでも、近ごろは何度でもおまいりすることにしている。それにしてもこんながらんが、七百余年の昔この北陸の地に、どうして建てられるに至ったのか、だれしも一応

は不思議に思うであろう。

学校でも宗団でも、政治経済の権力に近づいて伸びて行こうとたくらむものの多いことは、今も昔も変わりはない。そうすることによって、一応は勢力を張ることができるであろうが、その反面、本来の使命から遠ざかる結果におちいることもまた明らかである。今流にいうならば、研究の自由、信仰の自由をおかすものとしては、政治からの制ちゅうと干渉が最も強大であろうからである。

永平寺の開祖道元禅師は公卿の出であり、また寺院の多くが京洛の地にあるにかかわらず、その修道の本拠をわざわざこの越前の山奥に選ばれたのは、一に権勢の干渉から遠ざかり、真の研究の自由、信仰の自由の下で、道をきわめようと決意されたためであるといわれている。周囲の権力者の意思をそんたくしていては真理はつかめない少数でもよいから真の求道者ともに、静かに学びたいというのが、禅師の永平寺計定の抱負であったという。

近ごろ問題になっている、大都市からの研究機関郊外移転論と、禅師のこの理想とはもちろん本質において大きな開きがあるが、それはさておき、いやしくも研究の自由を全うしたいと望む者ならば、まず第一に自らが政治の場の付近でうろうろするのは禁物だとする禅師の心構えは、今の社会にこそ一段と必要なのではなかろうか。

さて朗らかな気持ちになって北陸から帰って見ると、留守の間に五十年来の親しい友人関野弥三君が八十八歳の高齢で亡くなっておられた。一度病床を訪ねようと思いながら、その意を得ないままにこうなってしまったのは残念でならない。

関野君は京大電気工学科開設直後から、およそ五十年もの間、一助手の地位に甘んじながら、すぐれた測定法の知識と計器取り扱い技能をもって、学生の指導に専念せられ、二千に及ぶ卒業生から敬慕せられていた京大電気科の一異材であった。道元禅師と関野弥三君とを並べて書くのは、何だか木に竹をついだようだといわれるかも知れないが、同君もまた学問と教育に専念する以外、名利には一切ふり向こうともしなかった点で、禅師の理想と相通ずるものがあったのである。

晩年鉛電池製造に関する大発明で名を成した島津源蔵翁も、若かりしころは関野君とは親しいつき合いであったらしい。というのは同じころから両氏ともに蓄電池の研究試作に没頭し、いわば同好の仕事が取り持つ縁であった。しかし当時では、どちらかといえば翁の方が学ぶ側であったらしい。あるとき話が硫酸濃度に及んだとき、突然翁が硫酸の中へ指をつっこんだ。どうするのかと見ていると、その指を口へ入れてなめはじめたという。いかにも翁の研究態度が端的にあらわれているではないか。これは関野君の直話である。

翁と関野君とはこういう間柄であったから、もし望むなら産業の要位につく機会はいくらでもあったであろう。しかし、同君[illegible]れにも見向きもしなかった。そして終生研究室作業衣を脱ごうとはしなかった。

阿波おどり

アリ

私は阿波の片田舎で生まれた。それで幼いころから、でこ（人形）芝居や阿波おどりを見せられながら育ってきた。

でこ芝居の方はともかくとして、阿波おどりが最近日本中のよび物となってからというものは、この私にまで、お前も阿波の男だからあのおどりを教えろと、所望されることがたびたびある。ところが私は一度もあれをやったことがない。というのは私は中学卒業まで阿波にいただけだが、あの当時は中学生がおどりに出たりすると、すぐ処罰されるというまことにやぼな時代であったので、私はおどりをおぼえずじまいで、郷里を出てしまったのである。いまにして思えば残念ではあるが、もはや手おくれなので、こういうことは一切考えないことにして、年をすごしてきた。

ところがこの九月のはじめ、たまたま民主教育協会の用で徳島へ行ったが、ちょうど旧盆にあたっていたので、はからずも盆おどり、いまいうところの阿波おどりを、とくと見ることができた。

このおどりは遠いむかしから全県下でさかんに行なわれていたが、良家の子女も参加し、振りそでや鳥追い姿で三味線をひきながら街頭を流して歩くと、男女市民がその後におどりながらつづく。いつのまにか、こういう組の数が増し、自然発生的に全市にひろがって行くというわけであったらしい。ところが十年ほど前からは、会社、銀行、学校、病院などあらゆる団体はいうに及ばず、県外からまで隊伍（これを連という）を組んで多数参加するようになったので、今日のように観覧席を設けたりする仕組みになってきたのである。

私は市が設けた観覧席におよそ二時間半もがんばっていたが、その前を通ったおどり連の数は大小百を下らなかったであろう。こういう席が市内に五カ所ある上に、街頭そのものが至るところまたおどり場なのだから、連の数はおそらく数百にも上り、おどり子の数は十万にも及ぶだろうといわれる。こんなボリュウムの大きい市民行事は、日本はおろか、世界中どこにもないのではなかろうか。

私にはおどりそのものについて批判を加える能力はない。ただ鳥追い笠、黒朱子の帯、ピンクのけだし、かろやかな駒下駄というイキな姿の婦人グループを先頭に、見る者ことごとくを「おどらにゃ損々」という気持ちに引きこまずには置かない「よしこの」のはやしにつれて、引きつづきひきつづき繰りこんで来るおどりの列は、人の心までなごやかに浮き浮きさせてくれる。

私は九月二日は原知事を県庁に訪ねたが、知事は「二日早く来てもらいたかったナー。おどりの初日には市内の主な連はまず県庁へくりこむ。知事室内で一巡りおどってから、市街へ出[illegible]。来年はそこを見に来てくれ」まことにながやかそのものではないか。

おどりの四日間は、おどり子と見物人で街がぎっしりと埋まるのだが、暴行とか、けんかとかの事故の起きたことはないそうだ。連と連とがおどりながら、街頭で行きあうこともまた相交わることも、もちろん頻繁であるが、いつも笑顔をかわして行きすぎる。酔っぱらいや、怒声を発している者などはここでは一人も見られない。すべての人が、ただただ楽しそうな顔をして、興趣をかき立てる「よしこの」リズムに乗って、手と足をしなやかに運んでいるだけである。こういうことは天正十三年以来の三百年余年の伝統がつちかった所産であろうか。

私もこんどはじめてふるさとの良さが、多少わかってきたような気がする。来年は早目に出かけて行って、おどってみようかと思う。足腰はまだまだ大丈夫だ。

訃音

清水勤二君（大正十二年卒業）

名古屋市立科学館長として、その建設に努力して居られた同君は、昨年八月病に冒され爾来療養につとめて居られましたが、遂に一月十日午後二時五十六分閉そく性黄疸のため名大付属病院でなくなりました。

同君は、本会副会長として、また中部支部長として本会のため尽力され、今日の本会隆盛の基礎を作られたことは、会員一同の深く感銘するところであります。

茲に会員一同とともに心からの感謝の念を捧げつつ、深く深く哀悼の意を表します。

予告

第十三回洛友会総会並に懇親会は来る五月十六日(土)午后四時から東京芝高輪光輪閣にて開催されることに決定しました。詳細は本会報次号にて通知いたします。

十四日会九州臨時大会記

大正十四年及び大正十五年卒業生の懇親会である十四日会だは、昭和三十六年五月大正十五年組の三十五周年の大会を熱海において開催しました。この時はじめての夫人同伴が思いがけない好評を得て、次の四十周年が待ち遠いとのことになり、皆様の御要望にこたえて、昭和三十八年五月に臨時大会を九州で開催することになりました。この時幹事として、富永、脇山、宮田の三名が選ばれました。その後幹事相寄り鋭意準備を進めておりましたが、今年五月五日及び六日に長崎及び雲仙において臨時大会を開催しました。

五日正午には出席会員の殆んど全員が全国各地より長崎丸山の料亭〝花月〟に集ってまいりました。また九州電力の企画で作られた、東映製作の九州の人と風土を紹介した映画〝火の国〟が上映されました。九州にはじめて来られた会員の方々には、九州の歴史と風土が極めてバラエティーに富み、人〔　〕次のような情熱と未来の可能性をその胸の底に深く秘めている九州に、一つの愛着をもっていただけたと思っています。その後〝端うた春雨誕生の地〟なる記念碑の立つ花月の庭で記念撮影のあと、長崎市内の観光に出かけました。

長崎は新しい文化の陸揚地であり、近世西洋文化の発祥の地であり、異国情緒のただよった町であります。長崎の町の一木一草に南蛮、唐、紅毛の歴史がふかくしみこんでいるようです。また長崎の歴史は江戸時代のキリシタン弾圧、二次大戦末期の原爆降下と受難の歴史といわれています。廿六聖人殉教の地、国際平和公園にその傷跡を残していますが、グラバー邸のある丘の上より見た美しい港と、世界一の規模をもつ造船所のたくましさによって、長崎がいつまでも象徴されるように祈りたいものです。

観光の終る午後四時半頃には総会開場の花月の広間には、長崎に起った唐土風の料理で長崎の人々が誇りとしている、卓袱(シッポク)料理の準備もととのい十組のテーブルを思い思いにかこんで、なごやかな雰囲気の内に総会の開会となりました。

宴の進むほどに春雨、おらんだ万才、浜節、ぶらぶら節と長崎の〝きれいどころ〟の芸が総会に花をそえてくれました。飛行機の運行中止で遅れた会員の集るころには、総会もいよいよ佳境に入り会員の余興も飛び出す状態で、宿泊地雲仙への出発時刻もいつしか過ぎてしまいました。次期大会の幹事の選出等全ての議事を終えて、雲仙〝宮崎旅館〟への貸切バスが花月の正門前をはなれたのは、八時半頃ではなかったでしょうか。パスの中は卒業後四十年に近い会員の集りとは思えぬほど、若さと活気がみちみちておりました。

六日は雲仙仁田峠への観光とゴルフが予定されておりましたが折わるく雨のため、雲仙、天草の山丘美と有明海の海洋美が交錯する大パノラマの景観を望むべくもなかった事は、誠に残念なことでした。観光及びゴルフに参加した人達も正午には宮崎旅館に集り、中食後次の大会にも皆元気で参加出来るよう誓って、名残り惜しく散会となりました。

なお、大会に先立って長崎へ集合する機会を利用して、九州横断観光旅行を計画しました。十五組三十人の希望者があり、青葉に薫る九州路を別府、阿蘇、熊本、雲仙、長崎へと合同旧婚旅行を楽しみました。

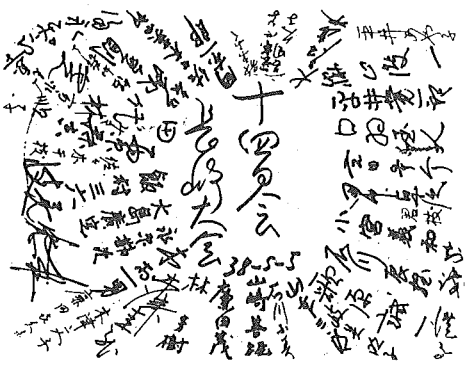
なお、九州臨時大会参加者は次の通りです。

大正十三年卒業
○岐美忠雄夫妻

大正十四年卒業
○一本松珠璣夫妻
○大久保達郎夫妻
○岡本一郎夫妻
○木津圭蔵夫妻
○口羽王人夫妻
○佐々〔　〕四郎夫妻
○富永和郎夫妻
○西原藤吉夫妻
○橋本真吉夫妻
山崎善雄氏　○脇山俊一氏
田代　寛氏

大正十五年卒業
○石川辰雄夫妻　飯村三六夫妻
○歌原誠一夫妻　大島広定氏
廉田　茂夫妻　木村一男氏
小宮義和氏　田中卓次夫妻
知識兼則夫妻　永原勘次夫妻
林　芳樹夫妻　平井寛一郎夫妻
○宮田秀介夫妻　山本三郎夫妻
○印横断観光旅行参加者

（十四日会九州臨時大会幹事補佐
昭和二十七年卒業　上田保之記）



神鋼電機洛友会

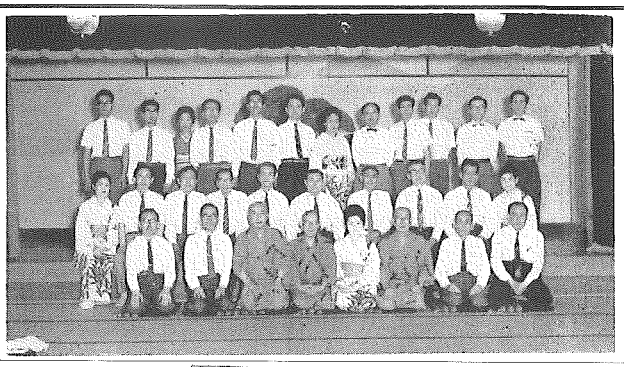
昭和三十八年六月二十日会長鳥養先生と、日本電池の山岡先輩が遠路にも拘りもせず弊地へ御越し頂きましたので、絶好の機会かと存じ弊地区洛友会を開催しました。神鋼電機に在職します京都大学卒業者は同封致しました名簿にもありますように、三十六名（電気卒二十六名）に達し、伊勢工場、鳥羽工場勤務者は、

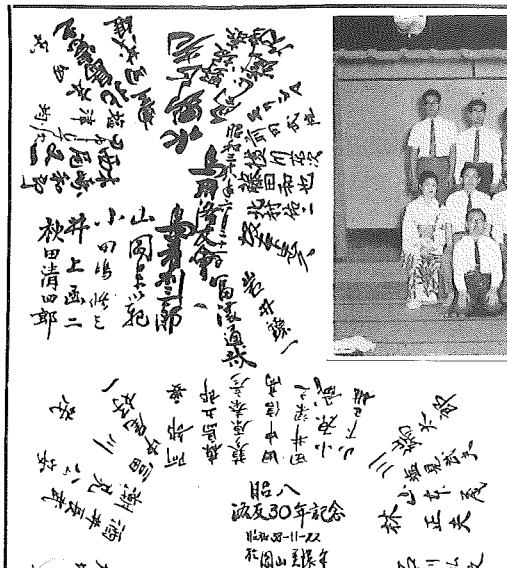
三十名（電気卒二十四名）で御座居ます。

毎年忘年会は開催していますが、此の処新入社員がありませんので、機会もありません。今回のように先生や大先輩の御見えになったときはまたとない機会かと存じます。此のようなわけで御疲れの大先輩に御出席頂いて盛況の中に、京大会と洛友会を同時開催しました。

同封の写真は出席者の記念撮影です。またその節寄せ書きしましたものを写真におさめたものです。

（横川京次）

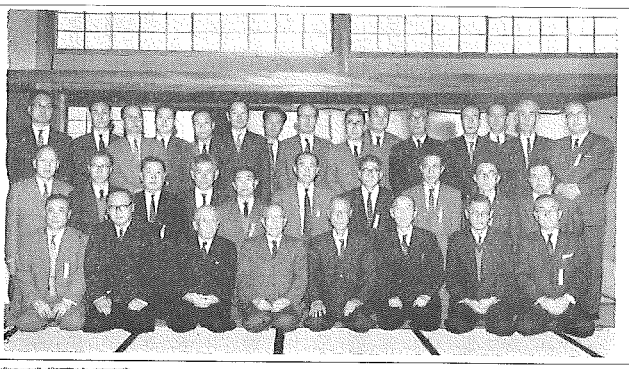




洛友会三十周年紀念クラス会

先般昭和八年組の卒業三十周年会を京都美濃幸にて開催、鳥養先生を初めとして、欧州御出張のためお目にかかれなかった林重憲先生の外は、岡本、松田、阿部、羽村の諸先生方のお元気な姿に接し、会する同窓二十八名の多数が先生を囲んで旧談新談に夜の更けるのを忘れました。

（塩見武夫）

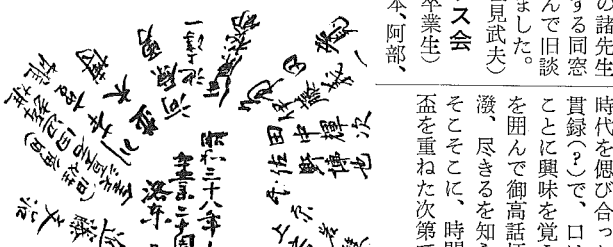


卒業二十周年紀念クラス会

（昭和十八年度卒業生）

去る十一月二十三日、岡本、阿部、松田各名誉教授の三先生と林（千）、清野大谷、田中の現役教授の諸先生の御臨席をえて、秋色深い洛東粟田山荘にて開催。集った同窓の面々は、東京、北陸、中国地方などから遠来の友を加えて十五名。卒業後二十年ともなると、争えぬは齢と云わんばかりに、頭にそろそろ異常の兆の現われ始めているもの、突出した腹の遣り場に困っているもの、互に慰めては昔の良き（？）時代を偲び合った。しかし二十年の貫録（？）で、口は達者になり、喋ることに興味を覚える年頃か、諸先生を囲んで御高話拝聴の傍ら、談論風潑、尽きるを知らず、京舞の余興もそこそこに、時間の経つのも忘れて盃を重ねた次第である。

（池上・近藤）



昭和二十二年卒業生
十五周年記念クラス会

昭和二二年九月に卒業して以来十五周年の記念クラス会をやや遅れ気味ながら、四月二十日北野天神境内の北野茶寮で開催した。

十周年記念のときは関電の寮で宴会を実施したが、今回は少し昇格した訳で、それだけ社会的地位も上昇？したとも云える。

この日のために用意した近況集を見ながら、各自からその活躍の状況が大いに語られて全く愉快な一時を過すことができた。

恩師も十名の御出席をえて在学当時の先生方大部分にお目にかかれ、終戦前後の我々生活の苦しかった時代が思い[illegible]して語られ、鳥養先生はじめ諸先生の語られるお姿は少しも在学当時とかわらぬお元気さで、我々大いに意を強くして次回二十周年にもお元気なお姿で御出席願えるようお願いした。

遠く九州、四国、中部、東京からも今日の集いにはせ参じた諸兄も多く、総勢二七名は卒業以来はじめての顔もありいづれも貫録がそなわって、一見思い出せない諸兄もあって、語る言葉のなつかしさが昔とかわらぬ姿を再現して全く愉快な一日であった。

（事務局幹事）

出席恩師　鳥養、岡本、松田
阿部　林（重）、清野、大谷
前田、近藤、池上諸先生
卒業生　井上、大貫、岡崎
奥田、加藤、兼松、小泉
小杉、坂井、坂元、高木
高月、辻　出口、橋本
平井、船越、松岡、松本（尚）
村井、村田、森本、山本（重）
山本（孟）、湯浅、小山、清水